

## はじめに

川口 裕司 (拠点リーダー)

21 世紀 COE では、海外および国内の研究者を招いて講演会・集中講義を行ってきました。多くの場合、講演者や講義担当者に原稿作成をお願いしてきました。フロリアン・クルマス教授のご講演は、2004 年 3 月に発行された『言語情報学研究報告 2 言語学・応用言語学・情報工学』に“Choice in Language” pp.79-94 として掲載されています。この他、2004 年 2 月には、宮本正美教授による「スペイン語コーパス言語学入門」の集中講義が行われました。

本書に掲載したのは、2004 年 6 月から 2005 年 3 月の間に行われた 21 世紀 COE 講演会の原稿です。以下に、講演者の先生方の略歴を紹介いたします。

ジョゼフ・F・ケス (Joseph F. Kess) 教授は、ハワイ大学で言語学博士号を取得された後、カナダ・ヴィクトリア大学の言語学部助教授になられ、現在は同教授です。1995 年には同志社大学で客員教授を務められたことがあります。2002 年よりアジア太平洋センター理事長も兼務されています。先生のご著書には、たとえば Joseph F. Kess, *Linguistic ambiguity in natural language: English and Japanese*, Kuroshio Shuppan, 1989 や Joseph F. Kess, T. Miyamoto, *The Japanese Mental Lexicon: Psycholinguistic Studies of Kana and Kanji Processing*, John Benjamins, 1999 などがあります。ケス教授には、2004 年 6 月 1 日に「カナダにおける心理・応用言語学の発展とその一例：日本語と英語の曖昧性についての比較研究」というテーマで講演いただきました。

ヴォルフガング・フィアエック (Wolfgang Viereck) 教授は、バンベルクのオットー・フリードリヒ大学の英語学・中世研究講座の主任教授です。2003 年まで国際方言学・言語地理学会の会長で、同学会誌の編集委員でした。1998 年には『ヨーロッパ言語地図』の座長としてプロジェクトを推進されました。フィアエック先生の講演は、2004 年 11 月 8 日に行われ、タイトルは「ヨーロッパの文化史について：ヨーロッパ言語地図からの洞察」でした。ご著書としては、Wolfgang Viereck, *Focus on England and Wales* (Varieties of English Around the World. General Series, Vol 4), John Benjamins, 1985. Gabriele Knappe, Wolfgang Viereck, *Idioms And Fixed Expressions In English Language Study Before 1800: A Contribution To English Historical Phraseology* (Bamberger Beitrage Zur Englischen Sprachwissenschaft, Bd. 47.), Peter Lang, 2004 などがあります。

ツトム・アカマツ (Tutomu Akamatsu) 教授は、東京外国語大学英米語科を卒業され、1983 年にリーズ大学で博士号を取得され、長年にわたり、リーズ大学言語学音声学学科で教鞭をとられました。ご著書には、Tutomu Akamatsu, *Essentials of Functional Phonology*, Peeters, 1992 や Tutomu Akamatsu, *The Theory of Neutralization and the Archiphoneme in Functional Phonology* (Amsterdam Studies in the Theory and History of Linguistic Science, Series), John Benjamins, 1988 があります。アカマツ先生の講演は 2004 年 11 月 26 日に行われ、「現代イギリス英語の発音：長期イギリス在住日本人の観察」というタイトルでした。

横山オリガ (Olga T. Yokoyama) 教授は、1972年にイリノイ大学、1979年にハーヴァード大学で博士号を取得され、1987年から95年までハーヴァード大学スラブ言語文学教授、1995年からはカリフォルニア大学ロサンゼルス校のスラヴ言語文学教授です。雑誌 *Folia Slavica* の編集委員も務められました。ご著書には、Olga T. Yokoyama, *Discourse and Word Order* (Pragmatics and Beyond Companion Series, No 6), John Benjamins, 1986 があります。横山先生は、「文化研究と言語一言語学を通して分かる世界」というテーマで、2005年3月10日に講演くださいました。

また、今回は論文を掲載することができませんでしたが、アイオワ大学の畑佐由紀子教授には、2004年12月24日に「日本語初級中級教科書の改訂とインターネット教材およびデータベースの作成」というタイトルの講演をいただき、ベルリン自由大学の山田ボヒネック頼子教授からも、2005年9月16日に、「現代欧州「複言語・文化主義」の言語教育哲学・理念・実践—評価基準設定の観点から CEP, ELP, DIALANG, Profile Deutsch を検討する—」という講演をいただきました。講演者の先生方には感謝の意を表したいと思います。

「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」では、今後もさらに、こうした講演会を続けていく予定です。